１．表現主義とバウハウス

a.モダニズム：初期バウハウスと理念、情熱
・ モダニズムの中のバウハウス
→バウハウスの理想と、ドイツでの造形運動の軌跡
→バウハウス初期に見られる傾向と表現主義
◇バウハウス・・・1919 年ドイツのワイマール市に開校された、造形芸術学校。
モダニズムを語る上で無くてはならない創作活動のひとつである。初代校長は、建築家の W・グロピウス。

◇理念・・・第一次大戦以前のドイツ工作連盟（※）の掲げる「産業の芸術化」運動に添った上で、「生活機能の総合場である『建築』のもと、彫刻・絵画・工芸などの諸芸術と職人的手工作など一切の造形活動を結集して、芸術と技術の再統一を図る」ことを教育理念として掲げ、バウハウスは後にモダン・デザインの確立と転向の一躍を担うこととなる。
しかし・・・
モダニズムの大きな特徴として挙げられる「総合芸術」や「合理主義」など、バウハウスの造形には、それらの要素を多く含んでいるが、それは構成主義に移行していった後に見られる顕著なものであり、むしろ初期バウハウスではその中でも特に「神学的要素」、「ユートピア」を求める、ある種熱望的な芸術、表現主義的な傾倒があったのではないか。

◇ 表現主義・・・新印象主義の色彩理論や激しい原色表現の影響を受け、色彩にお　　ける独自の表現力に目覚め、写実的役割りから解放した直感的に訴える表現手段をたらしめようと２０世紀最初の絵画革命。代表的な作家として J・アンソール、P・ゴーギャン、V・ゴッホ。

b.バウハウスの三脚：イッテンとタウト、グロピウス
・それぞれの人物の描くバウハウス
→人物像とバウハウスとの関わり
→当時の作品と作風

◇ヨハネス・イッテン◇
１８８８年ベルン生。絵画の教師から、修行を重ね、１９１６年に絵画展示を開き、「表現主義の画家」として認められるようになる。１９１４年、１９１５年に製作された「青い仕事着の男」、「水辺の家々」はキュビスムの濃い作品、「出会い」、「水平・垂直」のような抽象的な作品から見られる、ドローネ色彩絵画に親近感を持った幻想的な作風。バウハウスに招待されるが、そこでも「感情を表現する」絵画芸術観は変わらない。

◇ブルーノ・タウト◇
１８８０年ケーニヒスベルク生。木建築学校卒業後、建築家メーリング、フィッシャーの事務所で修行、１９０９年に独立。１９１３年国際建築展に「鉄のモニュメント」、翌年１９１４年に「ガラスの家」を設計。戦時中に考案された『都市の冠』、『アルプス建築』などは戦後に次々発表したことで、「空想の建築家」として有名。宇宙的なシンボル建築を核にしたユートピア的都市設計。

◇W．グロピウス◇

１８８３年ベルリン生。学生時ペーター・ベーレンス事務所でドイツ工作連盟の理念である「産業の芸術化」を学ぶ。１９１１年に「ファグス靴型工場」、１９１４年に「モデル工場」を建設。新進の工業建築家として活躍したが、戦後は産業政策の反省からタウトらの芸術革命運動へ。

c.内から外へ：後期バウハウスへの遺産
→バウハウスの転換期、「モダン・デザイン」の確立へ
→表現主義の相違と、外部世界への確立
＜対立＞
タウト・グロピウス・・・建築や都市環境（外部世界）に建設の精神を求めた
→芸術と技術の一体化
イッテン・・・身体訓練を通じた自己自身（内部世界）に表現をに確立を求めた
→芸術と手工業の一体化

バウハウスは「表現主義」から「構成主義」へと転換を迎える。それにより、「モダンデザイン」として確立されるようになる。

（※）ドイツ工作連盟
ドイツの建築家 H・ムテージウスが 1907 年ミュンヘンに結成した、「芸術と産業と職人技術の協力」を通じて工芸の「品位を高める」ことを目的とする団体。企業家・美術館長等のほか、初期の主要メンバーに J・M・オルブリヒ、J・ホフマン、H・ペルツィヒ、P・ベーレンスなどの建築家・デザイナーがいる。機械化と技能、芸術性の共存という両者の統合的精神は、ムテージウスの下で働き v・d・ヴェルデを敬愛した W・グロピウス（1912 年連盟加入）によるバウハウス（1919 年設立）へと受け継がれる。

２、 新造形主義、ピュリスムとバウハウス

バウハウスのおける表現主義的傾向から抽象主義傾向への転向ともいえるような「展開」の過程にはオランダの新造形主義・フランスのピュリスム・新興ロシアの構成主義など、諸外国の新しい芸術運動が大きくかかわっている。そのなかでも最も早くバウハウスとの接触があったオランダの新造形主義をとりあげた。

◆デ・ステイルがバウハウスに与えた影響

○デ・ステイル・・・1917 年にオランダで、ドゥースブルフを中心に画家のモンドリアンや建築家のアウトなどを含む芸術家で結成された。オランダ語で「様式」を意味する同盟の雑誌を中心とした造詣主義グループ。その活動は芸術のさまざまな分野にまたがり 20 世紀固有の表現、モンドリアンによって提唱された幾何学的抽象芸術理論（新造形主義）を用いた表現の可能性を追及した。

＊シュレーダー邸…さまざまな前衛芸術の吹き荒れる中、デ・ステイルは絵画・彫刻・建築を巻き込んだ抽象美術の運動として始まった。シュレーダー邸はその理念が建築に結びついた数

少ないもののひとつである。

〇ドゥースブルフ
バウハウスにおける手工作への復帰を時代錯誤と批判し、「機械の美学」の強調。画家が建築における色彩の形成者となり、新しい建築の創造において極めて重要な役割を委ねられているとかんがえ、画家と建築家との緊密な共同からなる「新造形主義の総合としての建築」を進んで企てて宣伝した。

◆デ・ステイルとバウハウスの相違
〇前提
＊デ・スティル…芸術用の主義を信奉するひとつの同志集団
＊ バウハウス…アトリエ中心の教育機関

初期バウハウスとデ・ステイルは新しい時代における芸術の役割を自覚し、望ましい未来社会の予見者、あるいは進路開拓者となることを両者ともに追求した。彼らはおもに倫理や経済政治などの諸原理によって社会の改良を目指すのではなかった。そうではなくて、芸術と生活の再統合をとうして社会の再建を試みたのであり、いわば一種の美的なユートピアへの渇望を共有していたといえる。これを実現していく具体的な方法として、現実生活の内に揺るぎない根をもつ建築芸術の統合を要請したのである。

〇しかし、明確な相違が…
＊建築における幾何学的な格子の設計のベース有・無→学長室
＊建築空間、室内空間の表現法のおける違い→アイソメトリー・アクソメトリー
：アイソメトリー・アクソメトリーの概念は後に出されたプロウン計画（新芸術確立計画）によりグロピウス・ドゥースブルフともに影響を与えた

３、構成主義、ダダとバウハウス　　～展開後のバウハウスへの外部からの影響～

◆表現主義から構成主義への転換
カンディンスキーとドイツ構成主義であるモホリ＝ナギがバウハウスの教師に就任
→それ以降のバウハウスは構成主義的傾向をとることになる。

◇１９２２年「第一回ロシア美術展」@ベルリン
エレンブルグ　リシツキー
国を超えた積極的な交流・・・　ロシア構成主義　ディ・スティル、ヨーロッパ構成主義

◇モホリ＝ナギ　ドイツ構成主義
構成メンバー　シュヴィッタース、リヒター　…ダダイスト
ドゥースブルフ…ディ・スティルのメンバー

・個人よりも時代精神の優先
・科学技術の積極的な取り入れ
・芸術と日常生活の積極的な関連づけ

□構成主義とダダ

●構成主義
ロシア構成主義…共産主義社会における新しい社会
ドイツ構成主義…技術進歩による新しい産業社会

ブルジョワ絵画に代表されるそれまでの芸術を否定するという点では変わりないが、ロシアではこの主義が１９１７年のロシア革命と結びつき、新しい社会（＝共産主義社会）において実現可能とされた工業化・大衆化を目指す。
これに対してヨーロッパでの構成主義は政治的な文脈から離れて広い視野で新しい芸術創作を目指していた。

●ダダ

１９１０年代半ば、世界各地（チューリッヒ、ニューヨーク、ベルリン、ケルン、パリ etc）で同時多発的かつ相互影響を受けながら発生した反芸術運動。

ダダは後にシュルレアリスムへと移行するが、その破壊と否定の基本精神は肯定的に創作に生かされ、１９３０年代以降の「モダン・デザイン」の様式形成へとつながる。

＜考察＞

バウハウスの「表現主義」と「構成主義」、その周辺に起こる「デ・スティル」や「ダダイスム」や（のちに「シュルレアリスム」）は、目指すユートピアは違えど、いずれも戦前・戦後の荒廃や、それを取り巻く産業化・工業化の波を受けた上で生まれた、新たな時代の新たな表現だったのではないか。当時は従来の平面的な絵画から、建築を中心とした新たな造形活動へと芸術の範囲を広げていったが、現代では建築など従来の形ある造形から、インターネットやデジタルという、ＩＴ化という時代の波を受けた上で生まれた、新たな技術と一体化した新たな芸術が、この時代と同様に形を変えて脈々と受け継がれているのではないか。
バウハウスは教育機関であった。そこでは新しいものを積極的に取り入れようとする姿勢があった。グロピウスは言う。『理念は変化し続けなければならない。』
これは彼がこの文献で読んだように、初期の段階で柔軟な姿勢を見せていたことからも伺える。しかしバウハウスは１９３３年に閉鎖され、バウハウスとしての変化は終わり、その様式だけが残っている。もし、バウハウスが閉鎖されずにいたとしたらまた新しく変化を遂げていたかもしれない。私たちはその様式だけではなく、その精神から今、何かを学び取る必要があるのではないか。

用語解説

●「新造形主義」
1920 年頃、P・モンドリアンによって提唱された幾何学的抽象芸術理論。当初、T・ファン・ドゥースブルフらと 17 年にレイデンで創刊した『デ・ステイル』誌を拠点に展開され、20 年

バウハウスから『新造形主義』として論集刊行。キュビスムを出発点として、垂直と水平の直線、三原色と無彩色の組み合わせからすべての形態を造形し、幾何学的に純粋抽象造形にいたることを主張。諸芸術ジャンルを統合する普遍的造形原理の獲得を目指した。

●「ピュリスム」
「純粋主義」。1918 年から 25 年の短期間、フランスで展開された絵画運動。

●「キュビズム」
1908 年、H・マティスが G・ブラックの抽象画に投げつけた蔑称に由来。この様式は、当時ブラックと P・ピカソが共働を営んでいたところから発したもので、無数の立方体の配置によって視覚を再統合するその試みには、アフリカのプリミティヴな彫刻、H・ルソーら「素朴派」の表現力、「自然を円柱、円錐、球として扱う」P・セザンヌの構造的連続性などの影響を指摘することができる。12 年までの禁欲的な作風は「分析的キュビスム」、その後のアサンブラージュやコラージュを用いた作品は「総合的キュビスム」と言われるが、決定的な差異は明確ではない。この運動は第一次大戦までと短かったが、戦後のさまざまな芸術運動に重大なインパクトを与えた。

そもそもは 1905 年、批評家 L・ヴィークセルがサロン・ドートンヌでの展示において、ひときわ異彩を放っていた A・ドラン、H・マティス、M・D・ヴラマンクらの絵画を皮肉った言葉。必ずしもマニフェストによって組織化されていた絵画運動ではなく、またその活動期間も 1903 年から 1908 年までと短命だったのだが、その影響は大きく、激しい筆致や大胆な色使いといった彼らに共通する特質は、表現主義という以上に第三世界の美術を連想させるためか、その後「フォーヴ＝野獣」派として広く知られるようになった。美術史的には、「表現主義」の色調と「印象主義」のテーマ性を多々共有する一方で、「象徴主義」的な観念性とは一線を画するものとされ、それらの特質は後に「エコール・ド・パリ」や「ドイツ表現主義」にも継承されていくことになる。そしてもちろん、「キュビスム」の色彩や空間構成にも大きな影響を与えたことも忘れてはならない。

参考文献

「モダンアート１００年（１）騒々しい静物たち」篠田達美　建畠哲　新潮社
「artscape 現代美術用語集」　http://www.dnp.co.jp/artscape/reference/artwords/
X-knowledge HOME 2002 AUGUST vol.08 BAUHAUS
「建築を語る」安藤　忠雄
「近代デザイン史 ?ヴィクトリア朝初期からバウハウスまで-」藪　亨